

渡辺勝馬先生を送る

小 野 祥 子

渡辺勝馬先生は「博学の人」とお呼びするのが最もふさわしい方である。23 年間にわたって英米文学科の英語学の教育・研究を支えて下さった。英語学は多岐にわたる広汎な分野であるが、先生は英語史、語源学、辞書学、意味論、文法論、社会言語学（とくに言語における性差）などの各分野に精通し、また英語のみでなく、ドイツ語、フランス語、さらに日本語の諸現象にも深い洞察をお持ちである。「ことば」の面白さが先生の究極の研究テーマであると思う。

お生まれは栃木県で、1958 年に東京外国語大学英米科を卒業なさり、さらに 1970 年に同大学大学院修士課程を修了なさった。都立高校、共立女子大学短期大学部勤務を経て 1979 年に本学に着任された。先生の業績は幅広く、多彩である。“The Kennings in Beowulf” (1971 年、『共立女子大学紀要』第 14 号) では古期英語独特の詩的表現であるケニングの研究をなさっている。また、「初期英語における完了表現—Beowulf の場合」(1982 年、『東京女子大学英米文学評論』) では、同じく古期英語を対象として英語史の観点から完了相についての分析を試みておられる。一方、大学院時代から持続的に進行形に関する研究をなさっていて、それを 1974 年の『英語青年』第 120 巻 7 号に「感情表現としての進行形」としてまとめている。先生が英語の用法について、早くから鋭い観察をなさっていたことに驚かされる。

しかし、先生の最大の業績は辞書の執筆・編集であろう。1966 年の『最新コンサイス英和辞典第 10 版』(三省堂) に始まり、『新英和中辞典第 3 版』(1971 年、研究社)、『新英々辞典初版』(1973 年、研究社)、『最新コンサイス英和辞典第 11 版』(1975 年、三省堂)、『新英和中辞典第 4 版』(1977 年、研究社)、『ユニオン英和辞典第 2 版』(1978 年、研究社)、『新英和中辞典第 4 版』(1978 年、研究社、部分改訂)、『新英和大辞典第 5 版』(1980 年、研究社)、『新英和中辞典第 5 版』(1985 年、研究社)、『新グローバル英和辞典』(2000 年、三省堂) まで、先生の精力的な辞書作りの軌跡をみることができる。英米で出版される辞書の改訂にも精通していらして、改訂された部分についての批評を日頃の会話の中でうかがうことができた。英語の新しい用法、意味などに常に敏感なアンテナをはり、辞書を up to date なものにすることに努力を傾注なさってきた。このような地道で息の長い仕事を完成させてきた先生の「英語」に対する尽きることのない興味と情熱にただただ感服させられる。辞書に関する業績として「Webster's New World Dictionary (Second Edition) の分析—応用言語学的見地より—」(1971 年、『電気通信大学学報』第 22 巻第 2 号、『英語辞書の分析』(研究社) と

して出版)、「英和辞書における訳語の変遷」(1983-1987年、森山健二他との共同研究)がある。日本で出版される英和辞典について熟知していらして、記述の誤りなどを適確に指摘なさる。かなり一般的に人気の有る辞書についても「間違いが結構ありますよ」などと注文をつけていらした。このような辞書作りの豊富な御経験を、退職に際して『東京女子大学学会ニュース』第124号に「中型英和辞典について」という小論にまとめていらっしゃる。これからの辞書作りに欠かせない差別語への配慮をはじめとする示唆に富んだ一篇である。

先生がかつて、「時間があれば、ことばに関するエッセイを書いてみたい」とおっしゃったのを私は憶えている。先生が、これも退職に際して、東京女子大学比較文化研究所の『比較文化』(48-2、2002年3月)にお書きになった「所変われば、品変わる一語いろいろ」はまさに先生の幅広い教養の滲み出る楽しめる記事であった。さらに、先生が落語を「ことばの芸術です」とおっしゃって愛好しておられるのは有名である。「ことばの面白さ」をエッセイに綴って、今後とも私達に先生の豊かな知見を伝えてくださるであろうことを期待してやまない。

さらに、先生の教育者としての御貢献について触れておきたい。学者の風貌に加え、穏やかなお人柄、さらに思いも寄らぬユーモアのセンスをお持ちで、当然のことながら、学生に大変人気があった。講義に交える先生のジョークは学生の間で語り継がれている。ただし、ときにはレベルが高すぎて通じないものもあったようである。学生指導にはとりわけ熱心に取り組まれ、静かなお話しの中できちんと厳しい指摘をなさって学生を導いてくださった。また卒業後教職につく人のめんどろを良く見てくださった。先生の研究室には御趣味のカメラがガラスの戸棚の中にびっしり並んでいる(特に魚眼レンズのついたカメラはしばしば訪問者を驚かせるのに用いられていた)。そこに、先生とのミステリアスな会話を楽しむ学生がぎっしり座っているのにしばしば遭遇した。学生にとって「勝馬先生」は英米文学科の「慈父」のような存在であったと推察する。

最後に、私事になるが、先生と私とで語源に関する本の共訳をさせていただいたり、辞書の語源欄を共同で執筆させていただいた。そのおりの先生の仕事の早さは驚くべきものがあり、もたもたしている私を助けてくださった。困った時にいつも黙ってさっと助けの手を差し伸べてくださり、大変有難く思っている。

長年にわたり英米文学科の教育・研究を支え、また、大きな包容力を持って分け隔てなく同僚・学生と交わりをお持ちになった。本学の学問的・精神的な面でのよき伝統を守り伝えてくださった渡辺勝馬先生に心から感謝し、御退職を惜しむ次第である。